

---

# BLOOD BLUE

虹雪まい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B L O O D   B L U E

### 【Nコード】

N 3 7 7 9 L

### 【作者名】

虹雪まい

### 【あらすじ】

それは単なる肝試し。

何の変哲もない、普通の中学校の普通の中学生が、せつかくの夏休みだし、と、いつものメンバーと、いつものように考えた、いつもの悪ふざけ。

怖がったり叫んだりしながら夜中の学校を回って、楽しかったねって笑いながら帰って、もしバレたら、後から親と先生に怒られる・・・。

それだけ、それだけのはずだった。

## B L O O D   B L U E   1 (前書き)

はじめまして、虹雪まいと申します。小説の投稿は初めてなので拙く見苦しい点多々あるとは思いますが、よろしくお願いいたします。

また、警告タグにもありますが結構グロテスクです。苦手な方はご覧にならないようよろしくお願いしますっ……

B L O O D   B L U E   1

そこには、踏み入ってはいけない時間があつた。

B L O O D   B L U E   1

懐中電灯の光が、夜の校庭を照らす。五つ並んだその光は、学校の生徒玄関を照らして、止まった。

「なあ、凜！。本当に入るのか？」

一人の男子生徒らしき少年が、面倒くさそうに横の女子生徒らしき少女に問いかける。

「ここまで来て、帰れないよー。」

「なんだよ頼斗、怖いのか？」

「阿呆か。」

つんつんと少年の肩を別の少年がつつくが、少年はまたもや面倒そうにため息をついた。

「でも……あたしは怖いな……ねえ、凜ちゃん、今からでもやめようよ……。」

「んもう、香奈は恐がりだなあ。大丈夫だよつ。」

少女に背中をぼんぼんと叩かれ、内気そうな、眼鏡をかけたもう一人の少女はしぶしぶうなづく。それを見て、少し後ろを歩いていた三人目の少年が、先ほど肩をつついた方の少年に話しかけた。

「凜と頼斗のその平然とした感じ、俺はすごいと思うよ？ね、達夜。」

「ん。俺は勇翔に同感。」

「そうか？」

「頼斗と一緒にしないでよ。」

「どういう意味だ・・・？」

市立南中学校。

部活動、成績共に並であり、ちょっとだけ悪名が高いこの中学校の二年生に、仲のよい五人組のグループがあった。

先ほどから学校の玄関でしゃべっている、冷静沈着な砂上すながみ 頼斗らいと、元気全開の倉橋くらはし 凜りん、ちよっとビビりだがリーダー格の高井たかい 達夜たつや、内気で優しい広瀬ひろせ 香奈かな、のんびりでおっとりな日野ひの 勇翔ゆうとの五人である。

その五人がなぜこんな夜中に学校に居るかというと、せつかくの夏休み、みんなで遊ぼう！と、言い出した凜が企画した肝試しを行うためである。

来学期からセキュリティが入ることが既に知らされているため、これが学校に侵入できるラストチャンスということもあり、凜と達夜はとても張り切っていた。

「さて、問題は鍵がちゃんと開いてるかどうかな。頼斗だけ？開けておいてくれるって言ったの。」

凜に問われ、頼斗は頷くと戸に手をかけた。

ギギ・・・

「開いてる、開いてる。って・・・え。」

頼斗は振り返って、またしても呆れたような表情を見せた。

少しだけ不気味な音を立てたドアに、他四人が硬直していたからである。

「あの・・・帰る？・・・そんなんで、肝試しになるのかよ・・・」

「？」

頼斗の声に、凜は強<sup>こわ</sup>ばった表情のまま「やる。」と言い切った。意地でも、やるらしい。

そんなとき、香奈がひゃあつと小さく声を上げた。

「あ……ごめんなさい！……大丈夫ですか？」

さすがの頼斗も、目を丸くする。泣きながら尻餅をついた香奈の後ろには……

青いカチューシャをつけ、白いワンピースを着た、少女の姿。

「い……え……あ……う」

「あ……えと……あの……ご、ごめんなさい！！」

固まる達夜に、少女はあわあわと手を顔の前でぶんぶん振った。その様子に気づき、頼斗が問う。

「……えと……あの、どちら様ですか……？」

「はうっ……！あ、わ、私、波<sup>は</sup>乃<sup>の</sup>っていいいます。あの……この二年生なんですけど……学校に忘れ物しちゃって……。」

少女……波乃は気まずそうにそういつて、少しだけ目を伏せた。はっとして、勇翔が頼斗へ視線を送る。頼斗は頷くと、香奈を立たせてから言った。

「俺らも二年なんだ。俺らは肝試ししようつて言つて、ここに来ただけどね。えつと……途中まで一緒に行く？一人じゃ、心細いだろ？」

「え？……いい……の？」

首を傾げた波乃に、頷いたのは先ほど思い切りビビっていた達夜。「いいに決まつてるだろっ。さつきはごめんな？びっくりしちまつてさ。」

波乃の顔が晴れたのを見て、五人はにっこりと笑った。

この学校には、養護学級がある。知的障害のある生徒を主として  
いるが、中にはいじめなどで通常の学校へ通えなくなった生徒も混  
じっているという話であった。

波乃は頼斗たちに二年生だと言ったが、同じ学年に彼女の姿は見  
受けられない。と、なると普通学級とはあまり交わりのない養護学  
級の生徒ということになるだろう。しかもこんなところにこんな時  
間に一人で居るということは、知的障害を持っているとは考えにく  
い。あの短時間で、五人はそこまで考え、心に傷を負っているであ  
ろう彼女を傷つけまいと笑って見せたのだ。こうみえて実は心優し  
いのである。と、いうかそれが、こんなに性格の違う五人がグルー  
プとなった由縁でもあるのだが。

「暗いと、全然違うところみたい・・・」

一歩足を踏み入れ、凜はそう呟いた。香奈にしがみつかれている  
ため少し動きにくそうだが、いつものように靴を脱いで上履きに履  
き変える。

「あ、波乃ちゃん、これ、懐中電灯、使っていいよ。あたし、凜ち  
やんといっしょに使うから。」

「あなた・・・ずっとあたしにしがみついているつもりなの・・・？」  
「うん。」

「・・・言いきるか・・・この子は。」

あきれ顔の凜に、香奈はにっこりと笑う。上履きを既に家に持ち  
帰ったという裸足の波乃は、その会話にぶっと吹き出し、楽しそう  
な表情で懐中電灯を受け取った。

「ありがとう。」



「波乃ちゃん、手、冷たいね。具合悪いの？」

心配そうに聞いた香奈に、波乃は首を傾げる。

「平気だよ。……ありがとう、心配してくれて。……えっと……？」

「あ、あたしは香奈。こっちは凜ちゃん。」

よろしく、と笑う香奈と凜に、波乃はにつこりと笑いかけた。

「香奈ちゃんと凜ちゃん。……よろしくね。」

「あー。ちなみに俺達夜！こっちが頼斗でこっちが勇翔な。」

少し後ろから達夜。波乃はぺこりと頭を下げた。

「よろしくつ。」

「とりあえず、電気つけないか？暗いと、波乃が忘れ物取りにくい  
だろ？」

頼斗はそういって、近場にあつたスイッチで廊下の照明をつけた。  
一気に校舎内がぱあっと明るくなる。

「あー。なんか安心……。」

呟いた凜にくすつと笑い、頼斗は波乃を振り返った。

「忘れ物はどこに？」

「……わからないんだ。たぶん、職員室の前の廊下か、トイレか、  
音楽室か、体育館……だと思っ。」

「あら。忘れたってより、落としちゃったんだね。じゃ、その順  
番に回ろうか。」

にこつと勇翔に笑いかけられ、波乃はコクリと頷いた。

パキッ

「にゃっ！」

達夜が奇声をあげた。急に近くで聞こえた、何かが軋きむような音。

あたりを見回す一同の中、ふと、頼斗は波乃の手元に目をやって、声を上げた。

「・・・波乃。それ・・・」

「え?・・・ひゃ!」

懐中電灯が、ひび割れていた。

「私、なにも・・・。あ、それより香奈ちゃん・・・ごめんなさい!」

怪奇現象に固まっていた香奈は、謝られてハッと我に返ると首を横に振った。

「大丈夫だよ。気にしないで。百均ひゃっきんだし。」

「うん・・・ごめんね。」

香奈は壊れた懐中電灯を波乃から受け取り、ポケットへ入れた。

そして六人は少しこの空間に違和感を感じながらも、その足を職員室へと向けた。

この時、誰かが「帰ろう」と一言でも言っていたら。

この時、誰かがこのメッセージに気づいていたら。

あんなことには、ならなかったのかもしれない・・・。

B L O O D   B L U E   2

職員室前まで来ると、また六人を暗闇が待っていた。

「えっと・・・電気、電気・・・あ、あった。」

波乃の手がスイッチをまさぐる。パチツという軽い音を立てて、  
電気がついた。

B L O O D   B L U E   2

下を向いてきよろきよろしている波乃に視線を送りながら、頼斗は横にいた凜に話しかけた。

「あのさ、凜。おまえ実は、あれだろ、波乃に出会えて肝試し無くなつたの、内心ほつとしてるだろう。」

「う・・・。」

凶星をつかれ、凜は少し照れくさそうに笑った。

「ま、ね。・・・頼斗にはバレてると思ってたよ。」

「そりゃな。だって凜、めっちゃ恐がりだろ・・・？」

頷いた凜に頼斗はふっと楽しそうに微笑んだ。

「ところで波乃ちゃん。君が探してるのは、一体何なの？」

勇翔に尋ねられ、波乃はくるりと振り返る。

「えっとね・・・。」

バンッ

「きゃ！」

「うわっ！」

大きな音を立て、急に学校中の電気が消えた。一同は軽くパニックになり、暗闇の中にしゃがみ込む。

凜に抱きつかれた比較的冷静な頼斗は、ポケットをまさぐり、懐中電灯をつけた。

パチッ

「落ち着け！・・・大丈夫か！？」

「ふ・・・えええ・・・頼斗お・・・」

横で情けない声がする。頼斗は右へ左へ光を動かし、他のメンバーを確かめようとした。そのうち、達夜と勇翔も落ち着いたのかライトをつけたようで、一応足下くらいは見えるようになった。

・ズルッ・・・ズルッ・・・

「!?!」

突然聞こえた、何かを引きずるような音。

シュルルッ ガツッ ガツッ

「何っ!?!」

それに続いて聞こえた得体のしれない鈍い音に、泣きそうな声で凜が叫ぶ。皆ほとんど手探りの状態で徐々に固まっていき、一同は一カ所に集まった。

「何なんだよこれっ・・・。」

達夜の呟きに、頼斗はいぶかしげにあたりを見回しつつ、言葉を発した。

「とりあえず、音の解明は後回しだ。みんないるか確認しよう。パニック起こしてたからな・・・どっか行っちゃまってたら困る。凜、いるな？」

「う・・・うん。」

「達夜は？」

「・・・いるぜ。」

「勇翔。」

「いるよっ。」

「波乃は？」

「い・・・います。」

「香奈。」

・・・。

「香奈っ・・・？」

返事が、無い。

「嘘！？香奈っ！？」

凜が声を張り上げるも、香奈の声は無い。

「・・・香奈ちゃん相当怖がってたからな・・・今のでびっくりして、どっか行っちゃったのかも・・・」

勇翔が言うと、同意するように波乃が小さく声を発した。

「わたし・・・探した方が良いと思う・・・。さっきの音も気になるし・・・。」

「・・・そうだな。分けられると危険な気がする。みんなと一緒に行動しよう。」

普段霊障なんかを一切信じない頼斗がそう言ったことによって、どうやらみんな覚悟を決めたようだ。五人は、そつと足を踏み出した。

「波乃ちゃん、怖いでしょう？俺の腕、掴んでて良いよ。」

「え・・・あ・・・ありがとう・・・。」

波乃は少し遠慮がちに勇翔の腕を取った。

確かめるように、一歩ずつゆっくり進んでいく。とりあえず近場から探そうということになり、再び電気をつけようと、波乃がスイッチを押してみるも、全く電気はつこうとしない。

「だめか・・・こりゃ、この小さい明かりで何とかするしかないな・・・。」

ふうつと、ようやく落ち着いたらしい達夜がため息。

「ブレーカーでも落ちたのかな・・・。」

「うん・・・。早く、香奈探そうよ。心配だ・・・。」

ズツ

「うわっ・・・！」

「ひゃ・・・!？」

とつぜん、目の前で達夜が消えた。驚いた一同に、しかし呑気のんきな声が届く。

「いたた・・・滑ったあ・・・つ。」

「なんだ・・・コケただけかあ・・・」  
勇翔がほつとした声を出す。達夜は照れくさそうに笑うと、ジーパンを履いた膝を払って立ち上がった。

・・・が、達夜をみる他メンバーは、既に笑ってなどいなかった。

「た・・・達夜・・・あ・・・足・・・」

「え？足・・・？」

払ったばかりの膝をみて声を上げた凜に、達夜も自らの足を照らす。

「う・・・うわあああっ！！」

そこにはべつとりと、赤黒い液体が付着していた。

「・・・血っ・・・！？」

「え、俺そんな怪我なんて・・・」

叫んだ凜に対し、達夜は慌てつつも自分の体中を確認し、言う。  
その瞬間、サアツと頼斗の顔が青ざめた。

「なあ、達夜・・・」

「・・・え？」

突然声を発した頼斗に驚き、全員がそちらをみやる。あの冷静な頼斗が、珍しく懐中電灯を持つ手を震わせていた。

「・・・お前、何に滑って転んだ・・・？」

その言葉に、達夜は恐る恐る自分の足下を照らし、今度は恐怖から、尻餅をついた。

「う……わあっ!!」

叫び声をあげた達夜の足下には、大きな血だまりができていて。

ピタンッ

……達夜の目の前に、新たな一滴がしたたった。

頼斗と勇翔がバツと天井を照らす。凜の瞳から、一気に涙が溢れ出した。

「いやあああああああああ!!」

天井から、ぶら下がっている『ナニカ』があった。

見覚えのあるその顔から、カツンッと音を立てて眼鏡が落ちてくる。赤縁あかべりの眼鏡が、レンズをも紅く染めた。

頼斗は、恐怖から口を大きく開けたまま、声を出すことができなかった。いや、恐怖よりも、シヨックというべきか。

天井のほんの少し出っ張っていた釘に、縄が掛かっている。その縄には、全身にいくつもの杭くいを打ち込まれ、血まみれとなった少女・

……香奈が、ぶら下がっていた。



B L O O D   B L U E   3

「う……うえっ!!」

「あ、お、おい、勇翔!？」

口元を押さえ、駆けた勇翔を達夜が追う。取り残された頼斗、凜、波乃の3人は、固まったまま香奈を見上げていた。

B L O O D   B L U E   3

「か……香奈……香奈が……」

凜がずるずると座り込む。さすがの頼斗も、ガクガクと震えていた。波乃は放心状態でぼーっと立ち尽くしている。

「……人間の……所業じやうごころとは思えない……。」

呟いた波乃。頼斗は香奈から目を離せないまま、コクリと頷いた。「こんな惨むごいこと……一体……どうして……」

頼斗は呟き、ぐっと拳を握る。そして、ふうつと深呼吸して光を香奈から避けると、頼斗の服の裾をぎゅっと掴んでいる凜に声をかけた。

「……凜、立てるか？勇翔は心配だけど、達夜がついてるし……とにかくこんなことになった以上、早くここを出た方が良く。とりあえず、玄関に向かおう。」

小さく凜が「うん。」と返答したのを聞いて、頼斗は凜を立たせると、波乃と三人で玄関へと引き返した。

「……!ら……頼斗君!」

月明かりが、そつと校舎を照らしている。青い顔をして叫んだ波乃に駆け寄ると、頼斗と凜も同じ表情になった。

「嘘……何これ……」

ガタガタガタ

どれほど引いても、叩いても、蹴っても、玄関の戸は全く開く気配はなく。ガラスを思い切り蹴ってみたが、感触はまるでゴムのようで、跳ね返されて頼斗は尻餅をついた。

「何だつてんだよ……!!」

「……どうしよう……あたしたち……それじゃ……」

……閉じこめられちゃったの……?

「……頼斗君、凜ちゃん。他にも、職員玄関とか、非常口とか、洗ってみよう。どつかから、出られるかも知れない……」

波乃の言葉に、頼斗も凜もゆっくりと頷いた。今度は頼斗を凜が立たせ、三人は再び校舎内へと戻る。

「……達夜と勇翔……どうしてるだろう……」

窮地に立たされたことで逆に落ち着いたらしい凜が、普段のトーンで呟いた。うなずいて、波乃が答える。

「吐きそう……だったように見えたよね。たぶん、トイレじゃないかと思うんだけど……」

ちらつと、波乃は凜をみる。凜はその視線に気づくと、青い顔のまま、頷いた。

どのルートを通っても、トイレまでには香奈の下を通らねばならないのだ。

「大丈夫。・・・今は、生きてるあたしたちを最優先しなくちゃ・・・！」

「・・・ん。じゃ、行こう。」

頼斗が凜の手を引いて歩き始めた。それについて、波乃も歩き出す。

・・・と。

ドスンッ

「何っ!?!」

急に聞こえた、何か、大きなものが落ちるような音。いやがおうにも研ぎ澄まされた三人の耳に入ったのは・・・

「うわあああああああ!」

・・・二度目の、絶叫だった。



**B L O O D   B L U E   3 ( 後書き )**

今回短めです……

B L O O D   B L U E   4

校舎内に響いた、達夜の叫び声。

「頼斗！波乃ちゃん！行こう・・・！！」

三人はすぐさま、駆け出していた。

B L O O D   B L U E   4

廊下を駆け、一直線にトイレへ向かう。幸か不幸か、その叫び声に完全に集中していたお陰で、香奈のことは気にならなかった。

「今度は・・・何だつてんだ・・・！！」

頼斗を先頭に、三人は全力疾走でトイレにたどり着いた。慣れている校舎内である上に焦っていたため、つけ忘れていた懐中電灯のスイッチを入れて光を動かす。

「・・・ら・・・頼斗・・・」

「・・・達夜！一体、どうしたんだ・・・？」

照らされた達夜は、先ほどとは比べものにならないくらいに、怯えた目をして座り込み、震える指で、自分の目の前・・・男子トイレの方を指さした。

・・・その瞬間にもたらされたのは、とてつもなく嫌な、予感。

達夜を照らした頼斗の代わりに、凜がトイレを照らす。

「……？」

照らした瞬間、凜は首を傾げた。見えたのは、学校指定の上靴の靴底。そしてそこからのびた、白くて長い、足。

「……！凜！波乃！見るな！」

「え……あ……」

頼斗が叫んだときには、既に、遅くて。

「いやあああああああ！！」

凜と波乃が、ほぼ同時に叫んだ。

足の先には尻があつて、背中があつて、肩があつて、……でも。

……その上が、なかった。

トイレの入り口で、大きなコンクリートブロックのようなものによつて頭をつぶされたその死体。辺りには血と脳髓らしきものが散乱している。

そしてその死体は、頼斗にとって見覚えのある……いや、見慣れた、服を着ていた。

「急に……これが天井から降ってきたんだ……。俺……反射的に避けたんだけど……そしたら……そしたら……勇翔が逃げ遅れて……」

達夜は、震えていた。そしてその言葉は、その死体が勇翔であることを、示していた。

凜が、くずおれる。頼斗も今回は、凜を支えることさえできな

った。

・・・また、惨い死に方で、突然、友人が、逝った。

「・・・あたしの・・・せいだ・・・」

ふと我に返り、一同は呟いた凜へ視線を送った。顔に直接当たらないよう配慮しながら、頼斗が凜を照らす。

「あたしが・・・みんなを肝試しなんか誘ったから・・・。あたしがこんなこと言わなきゃ・・・香奈や勇翔も死ななかつたし、波乃ちゃんだって・・・巻き込まずに済んだのに・・・っ！」

それを聞いて、頼斗は凜の横にしゃがんだ。達夜も四つん這いのまま歩み寄り、波乃も頼斗と同じようにしゃがむ。

「凜。おまえのせいじゃないよ。」

「そうだよっ・・・。大丈夫だよっ。」

「そんなこといったら・・・俺だって、ノリノリでここに来たんだから・・・！」

「・・・でも・・・!!・・・だって・・・!!」

話しかけた三人に、凜の顔から手が外された。上げた目から、大粒の涙が零れ落ちる。

気の強い凜は、滅多に弱音を吐くことがない。故に眼前の状況は頼斗にとって、困惑することこの上ないものであった。

しばらく達也も波乃も、動かなかつた。なんと言葉をかけていいのか、迷っているようにも見える。

頼斗は迷いに迷って、それから決心したように凜を見つめ

・・・そっと、抱きしめた。

「え・・・っ」

凜はかるうじて、それだけ声を発した。見ている二人は、らしくない頼斗の行動と、目の前の二人の構図に、既に目が点だ。



頼斗はしばらくして真っ赤になり、その状態のまま凜の頭と反対側へ視線を逸らすと、こう言った。

「バカなことというな。重荷に思う必要はないよ。……凜が殺したんじゃない。……凜は、悪くない。」

「うっ……うっ……」

凜の肩が、震え始める。頼斗は自らの顔の紅潮が治まった頃合いを見計らって視線を凜へ戻すと、優しく笑って、続けた。

「おまえ、女子で良かったと思えよ？男だったら俺、ブン殴ってるとこだ。」

「……頼斗お……!」

ぎゅっつと抱きしめ返され、頼斗は背けていた目を凜へ戻すと、その腕にもぎゅっつと力を込めた。

「……もう、平気か?」

声をかけられ、凜はうなずくとその腕を離した。頼斗もそっと凜から離れ、二人でハッと我に返る。

……いや、返らざるを得なかった。

「……頼斗……。うん。良かった。よかったよ。」

「……波乃、びっくりです。」

「や……。やめろっ!生温かい目で俺を見るなっ!」

「あう……。別な意味で心が痛い……。っ。」



B L O O D   B L U E   5

何はともあれ、無理やりではあったが落ち着きを取り戻した四人

「とにかく、脱出しなくちゃな……。」

「ああ。でも……勇翔が吐いてるの待ってる間、俺少し一階回ってきたんだけど、どこの入り口も開いてやしなかったぜ。」

達夜の言葉に嘆息し、頼斗が顎あごに人差し指を当てた。

「マジか……。他に非常口は……。」

「音楽室と、体育館。」

凜の即答に驚く一同。凜はにっこりと笑って続けた。

「さつき波乃ちゃんが落とし物したって話を聞いたとき、ふと、どこも非常口の近くだなあ』って思ってたんだ。」

B L O O D   B L U E   5

四人は泣く泣く香奈と勇翔を一階に残し、階段を上がり始めた。

三階にある渡り廊下の先に、音楽室がある。

「音楽室の非常階段って、かなり急だったよな……。」

「ん？」

ぼそつと、達夜が呟く。聞き返してから、頼斗は「ああ。」と何かに納得したように頷いた。

「……でもま、脱出するのが最優先だからな。」

「わかってる。それに、今更、高所恐怖症だあなんだって、言っ  
られるかって。」

達夜の言葉に、ふっと凧が足を止める。

「え、達夜、高所恐怖症だったの・・・？」

凧の言葉に、達夜はうつと声を上げて動きを止めた。なんとなく  
察し、波乃がくすつと笑う。

「かつこ悪いことじゃないよ。達夜君。」

「うーっ・・・自分でばらしちまった。」

赤くなつた達夜に、頼斗と凧もぶつと吹き出し、そのまま四人は  
笑いながら廊下を歩ききつた。

「あれ、開かない・・・。」

ガチャガチャと音楽室のドアノブを回して、波乃は首を傾げる。

この学校、セキュリティがまつたくなつていないため、鍵なんて  
どの部屋にもついてはいないのだが、そのドアはかたく閉ざされて  
いるようだった。

「出入り口と同じ原理なのかな・・・。」

「んー。力が足りないだけかもよ。ちよつと貸して。」

波乃が引くと同時に、達夜がノブに手をかける。波乃の長い髪が、  
少しだけ手に触れた。

懐中電灯を凧に渡し、達夜はノブを回すと、力を込めて思い切り  
引いた。

ガタンッ

「おつと・・・！」

「開いたっ！」

嬉しそうに凧が笑う。よろめいた達夜を頼斗が支え、四人は暗い

音楽室を覗き込んだ。

「・・・よく考えると・・・怖いよな・・・夜の音楽室・・・」  
「・・・うん。」

しかし、この後に及んで、四人にとって真夜中に鳴るピアノなんてもう、恐怖の内には入らなかった。もう既に、先程の現象が怪談なんて超越してしまっている。

「でも・・・非常口っていつも鍵かかってないか？職員室に鍵あるんだったら・・・結局出られないぞ。」

中へ足を踏み入れ、非常口へ歩み寄る。頼斗はノブを回して、三人を振り返ると、やっぱり、と頷いた。

「職員室も鍵かかってたよな・・・どうしようか。」

「・・・いや、鍵の在処あじかなら、俺知ってるぜ。」

「え？」

言ったのは、達夜。

「音楽の教科連絡係、なめんなよ。」

納得するように、凜は「ああ。」と声を上げた。達夜はこう見えて三歳からピアノを習っているため、音楽の教科連絡を勤めているのだ。

「ホントならこんなことすると調律狂うからダメなんだけどな。この中の、溝に・・・」

達夜はそう言って、ピアノの内部へ手を入れると、すつと引き出した。

「ほら、な。」

達夜の手には、金色の小さな鍵が光っていた。

「へえ・・・隠してあったんだな。」

「・・・問題は、鍵が回るかどうかだけだな。」

達夜はそう言って、鍵を鍵穴に差し込んだ。

力チヤ

「!・・・え、すんなり・・・。」  
逆に驚き、達夜はそう言って他三人を振り返った。

少しビビっている様子の達夜に代わって、頼斗がノブを握った。  
簡単に回るが、どうやらここも、しかし開きはしないようだ。

「・・・ダメ、みたいだな。」

達夜はうなずいて、鍵を引き抜くとドアに背を向けた。鍵を元の場所へ戻すつもりだろう。

「残るは体育館だけか・・・。どうも、望みがだんだん薄れてきてる気がするんだよね・・・。」

凜の瞳が曇る。横で波乃もこくりとうなずいた。

「・・・でも、諦められない。このまま死ぬなんてのはまっぴらだからな。」

頼斗はこんな中でも、半ば無理矢理笑って見せた。それを感じ取って、凜と波乃も笑う。

「・・・あたしも。このままじゃ、新学期まであたしたちも、香奈や勇翔も、見つけてもらえないじゃない。」

「腐乱死体になるのだけは、勘弁してほしいよねっ・・・。」  
肩をすくめて見せた波乃。そんな波乃に、再び頼斗と凜、達夜は、はにかむ。

・・・が、この悪夢の中、こんな平和が続くはずもなく。

バンッバンッバンッ

響いたのは、何かがい切りたたきつけられるような、何かが勢いよく閉まるような、そんな音。

・・・そして、振り返った頼斗、凜、波乃の三人は、しかとその目でとらえた。

「ああああああああああっ！！！！」

ピアノのふたが勝手に上下し、痛みには耐えきれず叫び声をあげる達夜。引き抜こうにも動かないらしく、目だけで三人に助けを求めらる。

・・・音楽室のピアノは鳴り出さずに牙をむき・・・彼の手の甲をそのふたで、何度も何度も、潰していた。

B L O O D B L U E 6 (前書き)

どんどんひどい話になっていってる気がします……。



B L O O D   B L U E   6

やまない音、響き続ける叫び声。

駆け出し、頼斗は達夜を思い切りひっぱった。二人で床に倒れ込み、そこへ凜と波乃が駆け寄る。

ピアノはしばらくガンガンとそのふたを動かし続け、十秒程で大人しくなった。

B L O O D   B L U E   6

「くっ……!!」

達夜の手は、指があらぬ方向に曲がり、爪も何枚かはがれてしまっていた。短時間にも関わらず、彼の指は赤、青、紫と様々な色に腫れ上がっている。どうやら、折れているのは間違いないらしい。

「あああっ!!」

「た……達夜っ!しっかりして……!」

寄り添い、凜がその肩を抱く。達夜の顔は、真っ青だった。

「ど……どうしよ……どうしよっ……!」

「……とりあえず、俺らだけでも落ち着こう。慌てても、何にもならない。」

頼斗の言葉に、波乃や凜はすっつと深呼吸すると、こくりと頷いた。

「とにかく……学校を出られなきゃどうしようもない。……凜。ここに残って達夜を見ていてくれないか?それから……波乃。一

緒に体育館に来てくれ。非常口、確認しに行こう。」

凜は少し心細そうにしながらも、こくりとうなずいた。波乃は波乃で少し怯えているようだが、頼斗の言葉に、「わかった。」とだけ答えた。

「・・・分かれるのは危険かも知れない・・・この状況じゃ、もしかすると二度と、会えないかも知れない。」

「・・・っ。」

凜の目に、不安と恐怖で涙が溜まる。頼斗はその目を見て失言に気づき、安心させるよう、にっこりと笑った。

「ごめん。大丈夫だよな。信じて、待つてくれよ。」

そのまま頼斗は落ちていた達夜の懐中電灯を拾った。ここには凜の懐中電灯があるため、心配はいらないだろう、ということだろう。

「ごめんな、頼斗・・・。俺が油断したばかりに・・・。」

「油断して・・・俺らみたいな普通の中学生が日々身の危険を恐れながら行動するかよ?」

軽口をたたき、頼斗は笑う。達夜も、ふっとその言葉に笑って見せた。

「・・・確かに。そうだな。」

「だろ?」

そして音楽室を出る間際、頼斗は暗い廊下をのぞき込んだまま、全く凜と達夜を見ることがなく、呟くように言った。それは、頼斗らしくもない、こんな言葉。

「・・・凜、達夜・・・。愛してるぜ。」

頼斗は達夜の懐中電灯を波乃に渡すと、そのまま波乃と二人で音楽室を出た。

凜も達夜も、しばらくその場から動くことができなかった。普段頼斗はこんなことを言うような奴じゃない。その目は何かを決意しているようで。そして、二人の頭によぎった、変な感覚。

「……凜……」

「……大丈夫。ただの思い過ごしだよ。」  
達夜を気遣い、笑った凜。しかしその目は、全く笑ってなどいなくて。

……頼斗と波乃にはもう、会えないような気がする……。

二人の思考は、完全に一致していた。

「……あいつ、殺しても死ななそうだし、大丈夫だよな……」

必死で言った達夜の冗談。凜は笑って、それでも頼斗と波乃が消えた、ドアの方を見つめていた。

「頼斗君。あの……体育館で、鍵とか、かかってないの？」

二階へと続く階段を下りながら、波乃が頼斗に問う。頼斗は少し後ろを歩く波乃を振り返ると、ポケットから銀色に輝く鍵を出してみせた。

「……え……？」

波乃が目丸くする。頼斗は笑って、その鍵を手中でもてあそんだ。

「今日、職員室から拝借しておいたんだ。肝試し、体育館でやろうと思って……なんたつてうちの学校の体育館は、いわくつきだからな。」

「いわく……？」

首を傾げた波乃に、頼斗は笑って。

「ま、後で話すよ。」

それだけ言うと、また正面を向いて歩き始めた。

「うん……。でも、怪談は怖いから……。聞きたくないな……」  
言った波乃に、頼斗は正面を向いたまま、「そうだよな、こんな  
ときに。」と呟くとポリポリと頭をかいた。  
「ごめん、デリカシーなさすぎたかも。俺。」  
「ううん。いいの。それに……。その話、私……。たぶん知ってる  
から。……。ひゃっ！」  
「え……。」

ドサッ

床が、目の前にあった。頼斗はつまずいた波乃に押し倒され、半  
分下敷きになっていた。背中へのつかる、波乃の体重。軽いのが、  
幸いした。

「はうつ！ご……。ごめんなさい！」

「いたた……。いや、平気だよ。」

そう言った頼斗の目に、影が差したのが見えて、波乃はすぐに頼  
斗の上から避けると、頼斗に手を貸し、立ち上がらせた。

「あの……。怒って……。る？」

「え？……。ううん。これくらい、平気だよ。大丈夫。」

「……。よかった。」

笑った頼斗に、波乃はほっとして微笑む。体育館を目の前にして、  
頼斗は波乃の目を見ると、言った。

「でもさ。波乃。」

「……。え……。？」

「凜！」

「・・・あつ！」

ドアの方を見ていた達夜が、声を上げた。息を切らして、波乃が音楽室へ駆け込んでくる。そのまま壁に手をつくると、笑って顔を上げた。

「体育館ね、開いてたよっ！出られるよ！」

「本当！？」

凜は泣きそうな目で達夜を振り返る。達夜も苦痛に歪んではいるが、嬉しそうな笑顔をみせた。

「で・・・頼斗は？波乃ちゃんを一人にするなんて・・・あいつらしくもない。」

聞かれた波乃は、少し困ったように眉を下げ、懐中電灯で廊下を照らし、道をあけた。

「頼斗君、体育館見張ってるって言って、残ってくれたの。だから・・・危険なのは本当は、頼斗君の方なんだ。・・・だから、達夜君に無理はさせられないけど、できる限り早く行ってあげよっ。」

うなずき、凜は痛みにふらつく達夜に肩を貸し、波乃が開けた道を歩き始めた。ようやく射した希望の光。

・・・気づくはずもなかった。

・・・絶望の連鎖が、未だ続いていることに。

ゆっくりと一段ずつ階段を下りていく。波乃が後ろから照らす光が、ゆらゆらと目の前で動いた。

「波乃ちゃん大丈夫？あたしたちの前ばかり照らしてて、足下見える？」

「うん。平気だよ。気にしないで。」

凜はその反応ににっこり笑い、達夜を気遣いながら足を進めた。少しずつ下の階が近づいてくる。

カチッ

「きゃ！」

「おわっ！」

最後の一段を下りきったそのとき、急に光が消えた。突然の出来事に足がもつれ、凜はその場に転ぶ。

「あいたたっ……た、達夜、無事……？」

「お、おう。凜こそ大丈夫か？……ごめん、手、貸せないけど……」

達夜に言われ、凜は「平気、平気。」と立ち上がると、スカートの裾を払った。

「やっぱり、持たなかったか……。」

背後から波乃の声がする。凜はポケットから自分の懐中電灯を取り出して、言った。

「電池切れそうだったんだね。大丈夫。あたしも持つてるから。」

「……そうだね。良かった。」

「波乃、転ばなかったか？」

達夜に問われ、波乃はしばらく黙り込む。そういえば先ほどから、波乃の口調がどことなく暗いような気が、二人はしていた。理由のわからない沈黙の後、凜が懐中電灯をつけると同時に、波乃は呟いた。

「こんな私でも……心配してくれるんだ……ごめんね……ありがとう……。」

「え……?」

顔に当たらないように、配慮して照らした先。凜と達夜は、目を見開いた。

「は……波乃?」

「波乃ちゃん……!?!」

……いるべき場所に、波乃は、いなかった。

二人は周りを照らすが、どこにも波乃の姿はない。

波乃は裸足だったが、いくらなんでも全くの無音で立ち去るなど、できる筈はずもなく。

二人の思考はしかし、そこでぴったりと停止した。

照らした先に見えたのは、少し開いた体育館の入り口。

「凜……!まさか波乃も……。」

「……い、行こう、達夜っ！」  
もう、さすがにその染みが何かはすぐに理解できた。

……凜たちの足下から体育館の入り口まで続く、何かを引きずったかのような赤い染みの正体が……何であるか、は。

手が使えない達夜の代わりに、凜が思い切り、体育館の分厚く固い扉を開く。

懐中電灯を使うまでもなく、体育館は月明かりに照らされ、幻想的な光景を見せていた。

「……凜……。」

「え……？」

足を踏み入れた瞬間、達夜は正面を見て、硬直した。凜も入り口正面の壁に掛かっている簡易の黒板を見て、同じように動きを止める。

黒板に、綺麗な文字が書かれていた。遠くて良くは見えないが、その文字は……鮮やかな赤。

二人は顔を見合わせ、駆けだした。黒板にたどり着き、その文字を音読する。

「……よくある学校の七不思議。その大半は嘘と勘違いから生まれたもの……でも、ここには本当に起きたことが、一つだけ混ざっているって、知っていますか？」……



「でもさ、波乃。俺、気づいちまったんだ。」

「……え……？」

頼斗はそう言っつて、懐中電灯を下ろした。廊下の窓から差し込む月明かりが、二人を照らす。

「違ったら困ると思っつてさ。言わないでおこうかと思っつてただけど……ここまでできたらもう、言っつても言わなくても同じだからな。」

波乃は、何も言わずに次の言葉を待っつている。頼斗は深呼吸して震えていた自らの手を、ぎゅっつと強く握っつた。

「この学校の七不思議、知っつてる？」

「……うん。オカルトとか、結構好きだから、調べたことあるよ。」

「そっつか、なら話は早い。六つ目まではあんまりにも普通でさ、ぜんぜん記憶に残らなかつつただけだな。音楽室で深夜にピアノの何とかが曲が鳴るだとか、何階だかの階段の鏡の前に四時四十四分に立つと吸い込まれるとか、トイレの奥から二番目だか三番目のドアを二回か三回ノックすると中で誰かさんが返事するとか。」

頼斗は肩をすくめて見せた。波乃は、黙っつて話を聞っつている。

「うさんくさいっつて、ずっつと思っつてた。幽霊なんか信じてなかつつたし……でもさ、七つ目だけはリアルで……なんか、記憶にはずっつりと残っつてたんだ。」

再び頼斗は波乃の目を見た。波乃の震える唇が開いた。

「……その、七つ目っつて……？」

ようやく声を出した波乃。その目はすでに、答えの内容を確信しっつているようだ。

「……学校全体からイジメにあっつて自殺した中学二年の女子生徒……通称“ブラッド・ブルー”の話さ。」



**B L O O D   B L U E   8 (前書き)**

すみません、ちょっとミスがありました；直しましたのでよろしく  
お願いします……

頼斗は波乃をから視線を外し、今まさに下りてきたばかりの階段を見上げた。

「・・・悲しい、話だよ。」

「あれ、どんななんだったかな？忘れちゃった。聞かせて、頼斗君。どんな・・・お話？」

波乃はにっこり笑って、頼斗に尋ねた。頼斗もその反応は予想していたのか、「ああ。」と頷いて見せた。

「・・・三十年くらい前のこと。今はもう無いこの学校の二年六組に、体の弱い少女が転校してきた。人当たりが良く、すぐにクラスにも馴染んだ少女は、休みがちながらも楽しい学校生活を送っていた。」

語り始めた頼斗に、波乃は頷きつつ、聞き入る。頼斗もその様子に安心したのか、再び口を開いた。

「しかし、ある映画が流行ってから・・・急に少女に対するクラスメイトの反応は、変わってしまった。・・・ある日、入院して三週連続で学校を欠席してしまった彼女は、教室に入って・・・その目を疑った。」

頼斗は目を伏せる。波乃も、少しだけ悲しそうに視線を横へ移した。

「皆、少女を見て笑った。そして近づくと、気持ち悪いと言って彼

女を避けた。病気で映画の話など耳にしていなかった彼女は何だかわからず、その日を終え、家に帰った。・・・そこで、知ることになる。そのとき流行ったホラー映画・・・『ブラッド・ブルー』のことを。」

頼斗はポケットを探ると、一枚の紙切れを出した。そこに印刷されていたのは、映画のポスターに使われていた一枚の写真。

「肝試し用に用意しておいたんだ、これ。・・・主人公が引越したマンションで昔自殺した少女の霊が、主人公の大切な人を次々に殺していくという、残酷な映画。・・・少女の悲劇は、こんな些細なものから始まってしまったのさ。」

頼斗は再び紙をポケットにしまうと、波乃の顔を見つめた。波乃も視線を頼斗へ戻す。

「少女はその題名をただだけで、自らがイジメにあつた理由を悟つた。・・・少女の名前は・・・『青地』<sup>あわぢ</sup>だったのさ。それが『青血』から『青い血』に脳内で変換されて、『ブラッド・ブルー』に繋がつたんだろうな。・・・でも・・・逆に言えば、ただそれだけのことだった。自分では変えることができない、そんなちっぽけで幼稚な理由だった。」

波乃はこくりとうなずいてみせた。頼斗は波乃の反応を確認してから、再び口を開く。

「日に日に、彼女へのイジメはエスカレートしていった。しかも、担任は休みがちな少女を疎ましく思っていたらしく、全く彼女を助けようとはしなかった。・・・むしろ、笑つてそのイジメを見ていたとも言われている。あくまでも噂話で、確証はないけどな。・・・それで、じよじよに不登校になっていった彼女を、保健室の先生が優しく諭したんだと。・・・まさかそれをきっかけに、最悪の事態を迎えるとも知らずに・・・な。」

この場所からよく見える保健室。二人は何となくそちらを見やつて、会話を続けた。

「『大丈夫、一時のことだ』なんて言われて少女はまた、保健室登

校をやめて、学校へ通常通りに通う決心をした。・・・そして、その決意の次の日、何があったかは知らないけど、心をばらばらに碎かれて・・・音楽室の非常階段から飛び降りた。・・・そしてかろうじて生きていた彼女は、病院へ運ばれる最中、この・・・体育館の前の廊下で息を引き取った・・・って話だ。」

波乃は保健室から頼斗へ視線を戻した。頼斗はそれを確認して、なにかを決意するかのように目を閉じた。

そう、それは重大な覚悟。そして、大きな・・・賭。

「・・・この話、あってるか？・・・青地波乃<sup>あおちのはの</sup>さん。」

沈黙が、その場を支配する。波乃はしばらく黙ったあと、静かに笑みを浮かべ、頼斗と向き合った。

「・・・そうか・・・ばれちゃってたか・・・。」

頼斗はほっとしたようにその体から力を抜いた。

「でも、いつ気づいたの・・・？私、精一杯隠してたつもりだったんだけどな。」

波乃は体の後ろで手を組み、足を動かしながら聞いた。頼斗は変わらず冷静な口調のまま、言う。

「映画の『ブラッド・ブルー』を知ってるや、気づきもするさ・・・ここに映画と同じ、ある方程式が存在する。・・・だろ？波乃。」

波乃は答えなかった。俯いた波乃に向けて、頼斗は再び言葉を投げかける。

「こんなこというと、なんか波乃をブラッドブルーだって言ってるみたいで嫌なんだけど・・・。でも、あるんだよな？おまえにも・・・例の能力が。」

波乃はしばらく無言で足を動かし続け、少し経ってから、こくりとうなずいた。

「そっか・・・勘がいいね、頼斗君は・・・いらなかったけどね、こんな能力・・・だってこれじゃ、本当に私、ブラッドブルーだもん・・・。でもね、気がついたんだ、私。この能力があれば・・・。」

彼らに復讐・・・できるんだって。」

波乃が浮かべた薄ら笑い。背筋に寒気を感じ、頼斗は息をのんだ。「それにね、頼斗君。・・・そのお話は、荒削りすぎるよ。・・・本当はね、もつと、痛くて、怖くて、辛いんだ。・・・ねえ。知りたい？波乃の・・・青地波乃の・・・悲惨な人生。」

波乃は相変わらず読めない笑みを浮かべながら言葉を紡いでいく。頼斗も押されてばかりではいけないと、深呼吸をして波乃の目を見つめた。

「・・・ああ。全部、聞いてやるよ。」

机に青いマジックで書かれたブラッドブルーの文字。波乃はそれを見て、唇を噛んだ。

(私・・・なんにもしてないのに・・・)

「なんだあ？見るよっ、不登校のブラッドブルーが来てるぜ！」

「うわぁ・・・来なくなってせっかく楽しい学校生活だったのにな！帰れよ！気持ち悪い！」

ポフッ

「きゃっ！」

投げつけられた黒板消し。白くなった制服を見て、波乃の目にじわりと涙がたまる。

「やだ、きつたない。」

「なに？泣くの？・・・うわー。情けない。」

波乃はぐつと涙をこらえた。・・・こらえて、叫んだ。

「・・・やめてよ！どうして？私・・・なんにもしてないもん！」

一瞬静まった教室。しかし、すぐにまたその静寂は、笑い声によって裂かれた。



「あつはははは！意味わかんね。」  
「なんにもしてないって……くく、俺らはおまえの存在自体が気持ち悪いって言うてんの！」

ふ、と、波乃の思いの片隅にあつた何かがうごめいた。

「……私は存在しちゃ、いけない？」

「は？……何言ってるの？おまえ。」

波乃がいるから、学校が荒れている？

波乃がいるから、医療費で両親が貧窮している？

波乃がいるから、みんないやな気分になるの？

「私が消えた方が、みんな、喜ぶ？」

「……当たり前じゃん。学校くんなや。」

そうか、と。

「……わかった。じゃあ、消える。」

その言葉を聞いて、何人かがその表情を変えた。波乃はそのまま教室を飛び出すと、屋上へ向かって駆けだした。

「……！青地さん！！」

何人かのクラスメイトが波乃を追う。もともと体が弱かった波乃は、すぐに捕まって、職員室へと連れて行かれた。

「離して！私は要らない！要らないんだから！！」

職員室へついてすぐ、一時間目開始のチャイムが鳴った。しばらく待機させられていた波乃は、担任の、見たことの無いような表情を目にした。

「……ごめんな、青地。先生、おまえのことなんにも考えてやれなかつたな。」

今まで、休みがちだった波乃を、先生はかなり邪険に扱ってきた。その担任が、職員室でみせた笑み。

「……おいで。先生と、二人でお話しよう。」

波乃は言われるがまま、担任について職員室を出た。

……しかし、人がそう簡単に変わる筈もなく。

「げほっ！い……いやっ！！」

「うるさい！騒ぐなっ！」

廊下に出たとたん、担任教師は波乃の首根っこを捕まえて、洗面所にその顔を押しつけると、粉の洗剤を頭からぶっかけた。

「げほっ……！げほ……ごほっ……！」

「おまえのような面倒な生徒がいるから……PTAから散々苦情が来る！クラスはまとまらん！……すべて……全ておまえのせいだ！！！」

むせる波乃。担任はその手を緩めない。職員室にいるほかの先生も、波乃の小さな声など聞こえるはずもなく。

十分ほどたつてやっと、担任教師は波乃を離れた。波乃はそのまま床に座り込み、荒い息を繰り返す。

「……もう二度と学校に来るな。それからそこ、掃除しておけよ。……今のことを誰かに話してみる、ぶっ殺すからな。」

波乃は、担任が去ってしばらくしたのち、ふらふらと立ち上がった、散乱した洗剤をモップで綺麗にふき取った。

鏡で自分の、粉洗剤で真っ白になった髪をみて、小さく笑う。

「先生。ごめんね。波乃のせいでこんなことさせて、ごめんね。」

呟いて波乃は女子トイレへ駆け込んだ。

「う……げあ……うぐ……」

胃の中のものを全て吐き出し、呼吸を整える。

そして、ふらふらと階段を上がった。渡り廊下の先を目指し、揺らぐ視界の中、足を進める。そして、音楽室の扉を開け、ピアノの中を探った。

非常口の鍵。それを手にして、波乃は笑う。

地面はすぐに……近づいてきた。

ドゴン

ものすごい音を立て、体中を激痛が走る。波乃は今自分が飛び降りた階段を見上げ、首を傾げた。

(あれ……。私、生きてる……)

波乃は無理矢理体を起こし、階段を這いあがった。一段ずつ、ゆっくりと、一番上を目指す。

(だめだめ。……もう一回。)

何度もずりおちた。そして、てっぺんに着こうとしたそのとき、非常口の扉が、勢い良く開いた。

「!……あ……青地さんっ!?!」

そこにいたのは、保険医。波乃は抱えあげられ、うつろな目でその姿を確認した。

……そして、最期の言葉を、述べた。

「あなたなんか、信じなければ良かった。」

**B L O O D   B L U E   9 (後書き)**

発案が小学生時代なもので荒削りですみません…。  
自己満足の塊のような作品ですがどうぞお付き合いください。

「そして、そのあと担架で運ばれ、私はここで死んだ。．．．まさに．．．」

波乃はそういうと、頼斗の方へ歩み寄った。

「．．．頼斗君、逃げないの？．．．私、幽霊なんだよ？」

頼斗は波乃の笑みにも動じず、そっと目をつぶる。

「今更逃げてどうするってんだよ。」

「．．．ふ．．．。」

自重を含む笑いを零す波乃。頼斗は続けて口を開いた。

「この付近で二十年前に起こった、連続怪死事件．．．。あれは．．．波乃が？」

「うん。担任と、クラスメイト五人．．．。私が、殺したの。」

頼斗の様子をうかがうかのように、波乃は頼斗の顔をのぞき込みながら、言う。

もっと怖がって、蔑んで、とても言うかのように、楽しそうに。

気付いているのかいないのか、頼斗はため息をつくど、すっと目を開けて、こう言い放った。

「．．．ふーん。そっか。」

「……え……？」

あまりに軽い反応に、波乃はいぶかしげに首を傾げる。頼斗は波乃のその動きに、ふっと笑った。

「いや、こんなこと言うとは世間的にはNGなんだろうけど、俺、そこまでおまえの行動、おかしくはないと思うぜ。」

頼斗はそういつて、『こいつ、バカじゃないか?』といった顔をしている波乃の頭をふわりと撫でた。

「ひゃ……」

「……辛かったろ?」

波乃の顔が、一気に赤くなった。頼斗はほほえんで、その手を離し、ちょうどさつきとは逆の立場。波乃の顔をのぞき込む。

「俺な、本当は波乃が間違つて香奈や勇翔を殺してしまったんだつて……思いたかつたんだ。」

頼斗の言葉に、波乃は頼斗の顔を見つめる。

「……気づいてはいたさ。……死ぬ前に必ず、二人は波乃に触れていたこと。……勇翔はおまえを心配して、腕貸してたし、香奈は俺は直接は見てないけど、言つてたろ? 『波乃ちゃん、手、冷たいね。』つてさ。あと、達夜も波乃の髪の毛触つてからあんなことになつたろ? さらに言えば、最初に香奈の懐中電灯が壊れたとき、持つてたのは波乃だったし、電気のスイッチがきかなくなったのも波乃が触つてからだった。……で、思い出したんだ。映画『ブラッド・ブルー』の幽霊少女も、確か触れたものを壊したり殺したりできるんだつたなあってさ。」

波乃は、こくりとうなずいた。それを確認して、頼斗は続ける。

「……だからこそ、間違つたんだと信じたかった。……誤つて触れたら死んでしまった。殺す気はなかつたんだと、信じたかった

んだ。」

「……あ……。」

波乃は何かに気づいたように、階段を見上げた。そして再び頼斗を見る。

「……そう。さっきので確信してしまった。……ごめん、実は波乃だけを体育館偵察に連れ出したのは……鎌をかける意味もあったんだ。もし二人きりになったとき、波乃が何らかの形で俺を殺そうとしたら……それは間違いなく……殺意があるってことだろう?」

頼斗の言葉に、波乃はうなずいた。

「……私、さっき……転んだように見せかけて……頼斗君を押し倒した。……わざと……あなたに触れた。……殺そうとした。……そこで、確信したんだね。」

頼斗はうなずいた。

「そういうこと。それに、俺らが波乃が死ぬまでに通ったルート通りの順序の場所で被害に遭ってるってのもあったしな。……ま、お陰で死ぬことも確定しちまったけど。」

笑った頼斗に、波乃は表情を変えず、ただ彼を見つめる。

「……でもさ、一個だけ、疑問があるんだ。聞いていいか?」

頼斗は顎に手を当て、下向き加減で尋ねる。波乃は無言でうなずき、少しだけ頼斗から離れた。

「……先生やクラスメイトはまだいいさ。なんたって人間失格ともいえる行為をさらっとやってのけた奴らだしな。……でもさ……なんで、俺らを殺そうとした?」

「……それは……。」

波乃はその問いに、頼斗から目をそむけた。

「……仲良さそうで……うらやましくて……妬ましくて……壊したくなった……から。」



頼斗はふうつとため息をついた。そして、「なるほど」と言ったあと、少し口調を強めた。

「おまえ、何もしてないのに酷い目に遭う辛さ、知ってたんじゃないか？」

波乃の目が、初めて泳いだ。

「残念なことに、おまえはおまえをいじめてた奴らと同じことをしちまつてるわけだ。」

「あ……でも……これは……」

「俺らがお前に何をした？」

「……っ。」

波乃は、青ざめた顔で膝を折った。

「私……自分のことしか考えずに……」

「ああ……それで三人も手にかけて。」

波乃は自分の手を見つめて一気に脱力した。頼斗はそんな波乃の横にひざをつき、その顔をのぞき込む。

「……乗っ取られてたのかもな、波乃。おまえ、ブラッドブルーに。」

「……う……あ……私……」

泣きそうな目で、波乃は頼斗を見つめた。頼斗はそんな波乃にちよつとだけ面食らって、立ち上がると波乃の肩をポンポンとたたいた。

「……間違いに気づくのって、もう、取り返しがつかなくなっからなんだよな。……重いぜ。この罪は。……でもな。知ってるか？」

「……え……?」

頼斗はふつと笑って、こう言った。

「『ブラッド・ブルー』って、実はハッピーエンドなんだ。・・・ブラッドブルーになってしまった少女の霊をな、その身を犠牲にして、主人公が抱きしめるんだ。・・・少女は泣きながら、みんなに謝罪する。そして、主人公はある台詞を言っつて、自分の部屋のベッドに倒れ込み、死ぬ。」

「ある・・・台詞って・・・？」

訪ねた波乃に、頼斗はちよつと照れくさそうに、その台詞を口にした。

「『・・・死んだらさ、あの世で一緒に遊ぼう。きつと説明すりゃ、死んだみんなも許してくれるさ。なんたつて、俺の友達だからな。・・・でも、代わりに約束してくれ。・・・』」

・・・俺で、最後にしてくれよ？

波乃の瞳から、雫がこぼれ落ちた。何度もうなずき、それから、頼斗に抱きついた。

「・・・うつく・・・あり・・・がとう・・・。でも私が行くのは地獄だから・・・きつとみんなと遊べない。・・・でもどうして・・・？どうしてこんな私のために・・・そこまで・・・っ・・・。」

頼斗はほほえんで再び波乃の頭をなでると、当たり前のことのようにつに言っつてみせた。

「・・・友達だからな。もう、波乃と俺らは、友達だから。」

階段を上がり始めた波乃は振り返り、月明かりにたたずむ頼斗を見下ろす。

「……頼斗君……。」

「……大丈夫だよ。……っていうとおかしいか……。……凜と達夜……。よろしくな。」

手を振る頼斗に、波乃も手を振って。

止まらない涙。それでも波乃は、笑顔を作った。

「じゃあな、波乃。……たのしかったぜ。」

……死ぬ間際とは思えない、穏やかな笑み。

……波乃は走った。まるで何かを振り切るかのように。

……音楽室まで一度も、振り返らなかった。

B L O O D B L U E 1 1 (後書き)

短い…

B L O O D   B L U E   1 2

黒板に記されていた、波乃の手書きであろう細かい記録。

凧は静かに涙を流しながらその場で膝を折り、達夜も手の痛みなど忘れて、立ち尽くした。

ドサッ

体育館の外から聞こえた、何か落ちるような音。

二人は言葉も視線も交わさず、ふらふらとその足を体育館の外へと進めた。

B L O O D   B L U E   1 2

「・・・達夜あ・・・。あたし・・・どうしてここにいるんだろう。」

「・・・ああ・・・俺も、同じこと考えてた。」

見下ろし、二人はこぼす。体育館前の廊下に、頼斗は変わり果てた姿で横たわっていた。

「・・・ねえ、頼斗・・・幸せ・・・だったかな。」

しゃがんで、凧は穏やかにほほえむ頼斗の頭をふわりと撫でる。

「・・・わかんねえ・・・俺には、わかんねえや。」

香奈や勇翔とは異なり、頼斗は安らかな表情で、眠るようにしてそこにいた。胸の上上げられた、一輪の花。

・・・その青い花は月明かりに、燦然と輝いていた。

拝啓 青地波乃様

あれから、五年の月日が過ぎました。

あの日のことは、私たちの記憶に深く刻まれています。でも、頼斗も言ったとおり、

私たちはあなたを恨んだり絶対にはしません。

だって、私のまわりには今、奇跡が溢れているのです。

最後の最後に感じた背後の気配。

私たちの肩を優しくたたいたのは

・・・あなただったのでしょうか。

だとしたら、この奇跡はあなたがもたらしたのですね。

あの不思議な時間は、いろいろな意味で貴重な体験だったのか  
もしれないと、

今となっては懐かしく思っています。

とにかく私はこの奇跡の中で、噛みしめています。

たぶん、忘れることは無いのでしょうか。

夢か現か、未だにわからないあの日を。

夢か現か、未だにわからない今を。

どこか近くて遠いところにいる、

あなたを思って、暮らしていきます。  
では、またいずれ会いましょう。

敬具

「凜ー！いつまでそこにいるんだよー！」  
「うわっ！」

遠くから聞こえた達也の声に、凜ははっと我に返る。握りしめていた手紙を目の前の小さな石碑の前に置き、すっと立ち上がった。

「凜ちゃん、今日はカラオケだよっ！早く行かなきゃ、満室になっちゃうよ！」

「まあまあ、落ち着いて。焦ったってしょうがないよ。」

凜は自分を呼ぶ、聞きなれた声に笑い、立ち去る前に、石碑・・・音楽室の非常階段の下につくった小さな石の花を振り返った。

・・・そこに、白いスカートがひらめいた気がして、目をこする。  
（・・・気の・・・せいかな）

「凜？」



「！」

呼びにきた、背の高い影。

凜はその顔をじっと見つめ、いぶかしげなその表情にふっと笑って、その手をぎゅっと握った。

「いや、なんでもないよ。行こっ！・・・頼斗っ。」

・・・彼らは知らない。その背後で、青い花を手にした少女が、にっこりと微笑んでいたことを・・・。

**B L O O D   B L U E   1 2 (後書き)**

完結ー！読了頂いたみなさまありがとうございます！

そして超展開の数々、お許しくださいませ…。

読み返してみれば悲惨な作品でした…精進いたします…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3779/>

---

BLOOD BLUE

2011年4月1日14時57分発行